

外国人講師を学校に迎えて

——外国人講師と日本人教師のより良い関係を築くために——

国立久留米工業高等専門学校

糸 瀬 征 夫

1. はじめに

現在全国の中学校や高等学校に3000名以上の外国人英語講師（AET）が派遣されて、日本人英語教師（JTE）と共に教壇に立っている。「役に立つ生きた英語」を教えることの必要性は日本人英語教師が最も強く感じているはずだから、手放して外国人講師を歓迎すると思われるのに、現状はその存在をうとましく思っている英語教師もいるといわれている。外国人講師を導入する日本人英語教師たちのこのような意識を変えなければ、せっかくのこの制度も絵に描いた餅に終わってしまう。外国人講師と日本人教師との良い連携がなければ大きな教育効果は望めないのである。外国人講師の英語の授業に及ぼす効果や問題点はすでに各種の研究誌や研究会等において数多く報告されているので、ここでは外国人講師と日本人教師の関係に的を絞って、双方に見られる問題点を考察することにする。

2. AET 導入に積極的な鹿児島県

今年の九州地区英語教育研究大会は10月に鹿児島市で開かれたが、その大会に出席して驚いたことがある。過去に出席したこの種のどの大会よりも AET の姿が多く目についたことである。参加していた AET はほとんどが鹿児島県に配属されているということだった。鹿児島県は九州の他県に先駆けて AET 制度を積極的に推進し、年々 AET の数を増やしてこの制度の先進県になっているということが彼らの話からうかがえた。ステージの上で行われたティーム・ティーチングで AET のカナダ女性の潑刺としたアシスタントぶりもさることながら、休憩時間に交わした数人の AET との会話からも中学校や高校での英語の授業にかける情熱が感じられ、これからの英語教育に明るい展望が持てて心強く思われた。

3. 日本人教師の意識と態度の重要性

長年の間、私は長崎県の高校で教鞭をとってきたが、その間に見聞した AET 制度推進の経緯を思いおこしてみたい。長崎県と鹿児島県が1987年から1991年までの5年間に導入した AET の数を比較すると、長崎県は100名なのに対し、鹿児島県は223名となっていて半数にも満たないことがわかる。（自治体国際化協会出版の冊子『JTE プログラム—5年とその将来展望』による）しかし、日本の西と南の果てという辺境にあり、離島を多く抱

えているという地理的類似条件をもつ県同士であるからには、これまでに至るには相当の共通の苦勞があったものと推察される。両県ともその昔、日本が西洋文化を受け入れる門戸となった場所である。西欧文化に先鞭をつけて受け入れた両県が、第二の「黒船の到来」にたとえられている AET 制度を率先して推進してきたのうなずけるのである。教育委員会の努力があつてこそ、これほど多くの AET の受入れが実現したのだらう。そして現在、彼らは都市部だけでなく辺地の町や村においても外国人だと言って好奇の目で見られることも少なくなつてきている。やっとな、本来あるべき姿の理想的な英語教育ができる受け皿が用意されたといつていいだらう。せつかくの AET 制度の良さを生かすも殺すも、彼らを迎えチームを組んで英語を教える JTE と、同僚となる職員全体の意識と態度次第ということになるだらう。

4. 国際理解教育の必要性

臨教審の答申を引き合いにだすまでもなく、我が国の学校教育は国際化を意識して、これまでにない変革を迫られている。最近の我が国と外国間に見られる経済や文化は国家や企業間のみならず、私的で個人的なレベルにおいても、ますます国際交流を拡大しているのである。中学生や高校生がアメリカやイギリスから送られてきた商品カタログの写真を片手に、自宅のファックスを使って英文で直接注文している時代に入っているのである。かたや最近、労働目的で非合法的に來日した外国人の増大が社会問題となっているが、彼らが我が国の労働力不足を補つてくれていることを考える時、国際社会における相互依存がますます度を増しているのを実感している。つまり我々の日常生活はすでに国際化の波に浮いているのである。将来の社会をになう若者に対する国際理解教育の必要性が最近特に声高に叫ばれているようだが、実際にはもう遅きに失した感がある。交通や情報伝達手段や国際間の人的交流がこのように目まぐるしく発展する国際社会の変化を予測することは一昔前には難しかったのだから、仕方のないことだらうが、少なくとも現在学校で学んでいる生徒たちからでも「国際社会における日本の立場」という観点から国際理解教育をより一層押し進めていかなければならないと思うのである。

5. 国際理解教育はまず英語から

学校において国際理解の推進に向けて教育活動を行う場合、全教科において様々なアプローチの仕方を考えるべきだらう。しかし、どうしてもまず始めに国際語となっている英語教育に的が向けられるのは避けられないことだと思ふ。すなわち英語教育の改善と充実が求められてくるのである。昭和62年に教育課程審議会による答申で、「中学校及び高等学校を通じて、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養う」という観点から、特にコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培うことを重視する」という英語教育の改善の基本方針が打ち出されてから、それまで以上に英語教育現場

で教え方の変革が叫ばれるようになってきた。英語教師として30年近く教壇に立ってきた私にとってこの数年ほど英語の授業で大きな変革が求められている時はないと実感している。

6. 受験英語の指導に追われる JTE の悩み

昭和20年代後半から30年代前半にかけて中学、高校と大学での英語教育を受けた私は、「読み」「文法」中心のいわゆる古い英語教育を受けた世代である。英語教師になってからも当然のように、精読と文法中心の授業を営々と続けてきたのだった。若いころ参加した各種の英語教育研究会では、時たま「聞くこと、話すこと」を重視した実験的研究授業が行われたりしていたが、それを見て英語教育とはこうあらねばと感心する一方で自分の力量ではとてもついていけないという諦めの気持ちが先行したものであった。またそのような模範授業は長い間その授業のためだけに準備した結果生まれたものであって、単に理想の形を紹介したにすぎないとひねた見方をしていたのだった。すなわち自分の力量不足を棚にあげて、日本人教師による授業で毎回そのような理想的な指導などできるはずはないとたかをくくっていたのであった。特に若い頃は新しいことに挑戦しなければならない人生でもっとも燃える時期だったはずなのに、毎時間受験英語の指導に追われていたこともあって、自分だけの狭い考えから抜けきれずに進取の気性に欠けた英語教師を長年続けていたのである。私の勤めていた高校は県下でも名高い進学校だった。総合選抜で均等に分けられた生徒たちを3年間で他の高校より一人でも多く有名国立大学に入れるために受験指導にしのぎを削らねばならない環境であった。当然英語の授業では「読み」「書き」「文法」が中心の詰め込みとテストの繰り返しであった。模擬試験の結果に一喜一憂し、自分の担当しているクラスを他のクラスに、また自分の学校を他の学校に負けさせまいと必死になっていたものだった。競争に勝つということに仕事のし甲斐を感じていたのである。同僚の教師たちも自分と同じような考え方でお互いに張り合っていたし、そうするのが当然だと思っていたようだ。一流大学を志向する親子とその傾向を助長する社会構造がある限り仕方のないことだと自分の教育観を正当化していたふしがあった。現在の若い教師の中にも同じように猛烈な受験競争に生き甲斐を見出している人が多いが、この傾向は私の勤めていた長崎県だけでなく、九州の各県の学校でもある程度共通しているのではないかと思う。それゆえに、英語の授業に AET を導入することに関しては、多くの JTE が私や同僚の教師と同じように、受験英語教育と AET の導入による新しい英語教育とのギャップに戸惑いを感じているだろう。そして AET との授業の上手な運用の仕方を模索して苦戦苦闘している状態ではないかと思う。AET との共同授業の仕方を取り扱った本が最近書店の棚に目につくようになった。だがどれも見ても AET とのよりよい付き合いが試行錯誤的に行われているなかで、英語授業現場での教師の苦悩が見え隠れしているのである。今後 AET と一緒に英語教育のより大きな効果をあげるために、ますます論じられねばならない問題だと思う。

7. AET との初めての出会い

私は以上述べたように、始めから「聞く」「話す」を中心とした英語指導志向の教師ではなかった。私の古い英語教育観を徹底的にゆさぶったきっかけが最初の AET との出会いであった。10年以上も前になるが、長崎県に始めて一人の AET が赴任してきた。たった一人だから県下の中学、高校を一回訪問するだけで任期が終わる状態だった。それでもその AET の存在は県下の JTE の間で大きなインパクトとなり、ずいぶん話題になったものである。つまり従来の英語教育を変える福音の兆しを期待する気持ちと、それまでの自分たちの指導法は通用しなくなるのでは、という不安感で自分の学校に迎えるまでの間落ち着かない日々を過ごしたものだ。私の学校にはその当時12名の JTE がいたが、名だたる受験校ということもあって、考え方の違いはあっても、授業では上記の私の方法とあまり変わらない方法で指導がなされていたようである。AET 導入の件について話し合った時、理想とする英語教育のために積極的に AET を受け入れようということになった。ところが、その話し合いで本音が表れなかったことが後でわかり、JTE の複雑な教育観の縮図を見た思いがした。

8. AET に対する JTE のタイプ

AET に対する JTE の接し方にはいくつかのタイプがあるようである。第一のタイプは英語を話すのが好きで積極的に AET と接触しようとする教師である。彼らの多くは海外に出かけて英語研修を受けたり旅行したりした経験があるので、英語で会話をする楽しさを知っている。その上、従来の日本における英語教育に疑問をいだいて、「読み」「書き」「文法」中心の指導を「聞く」「話す」を意識した指導法へと変換しようとして努力している。AET を喜んで受け入れるので、このタイプの教師たちの要請で AET が学校に配属されてくる場合が多い。このような教師は授業の準備の段階でも AET との意志の伝達を割合スムーズに行えるので授業もうまくいく。お互いに建設的に意見を出し合って授業の準備や反省をするので授業も良くなっていくのである。このタイプの JTE とのチーム・ティーチングは長続きし、AET はおおかた充実感をいだいて学校を去るようである。

第二のタイプは第一の教師と同じように英語を話すことに非常に興味があり、日頃から「聞く」「話す」に力点をおいた指導を取り入れ、AET を積極的に学校に招こうとするタイプである。そこまではいいのだが、生徒のためというよりも自分で英語を話す満足感を得るためや、自分の会話力を生徒の前で披露するのが主目的という点で第一のタイプとは異なるのである。一匹狼的な个性的な人が多く、指導に自信があるので、AET と相談しながら授業を進めていくというよりも、自分主導型でひとりよがりの指導になってしまうことが多い。それで AET 側にすればチーム・ティーチングのやりにくい相手とみなされるようである。

第三のタイプは、割りと年配の教師に多く見られ、これまでに外国人と接するチャンス

のなかった人達に当てはまるようである。若い教師でも大学時代に外国人教師の指導を受けた経験がない人に多いようである。第一や第二のタイプと違うところは、外国の文化にあまり興味や関心を示さないという点である。従って、外国へ観光や研修旅行に行った経験がない人が多い。しかし、英語教育の改善が叫ばれている中で、AET の存在は重要だと認識しており、外国人と付き合うのは苦手だが、生徒のためには AET とのチーム・ティーチングもしかたのないことだと思いながら AET を受け入れるタイプの教師である。ところが、実はこのタイプの教師が AET との付き合いによって最も良い方向に変身する人達である。始めは消極的に AET を受け入れるのだが、チーム・ティーチングのために授業の打ち合わせをしているうちに、英語で意志を通じ合わせることの楽しさがわかってきて、積極的に AET と付き合うようになってくる。英語の会話力は少々不足していても、努力と人柄の良さによって生徒を引きつけ、充実したチーム・ティーチングができるようになるのである。AET が常駐している学校では、時がたつにつれて AET と何の違和感もなく付き合えるようになる人が多いようだ。数としてはこのタイプの JTE が最も多いので、将来の英語教育の展望は明るいものがあると思う。

最後のタイプは第三のタイプの教師と同じようにこれまでに外国人と接するチャンスがなかった人がほとんどで、多くは英語を話すことに興味を示さない人達である。英語の総合的な力はあるにもかかわらず、英語を話すことに興味もないし会話力が乏しいので AET が来ても話そうとしない。この点がたとえばはじめは外国人が苦手でも努力してこの制度を利用しようとする第三のタイプの教師とは異なるのである。だから AET が来ても直接会うのを避けようとしたり、ましな場合はちょっと挨拶する程度で、チーム・ティーチングは他の人にまわして自分はしない。

9. AET に求められる豊かな人間性

以上述べたような様々なタイプの JTE に対応しなければならない AET の苦労は大変だろう。今までとは全く異なる文化圏での生活に慣れなければならない上に、学校においては JTE との付き合いで気苦労がある。更に学校によっては生徒の学習に対する意欲の差からくる指導の難しさに対して JTE できさえも授業中の指導に手こずっているところもあるが、ましてや言葉のわからない AET にとっては、学習意欲のない生徒たちを相手に授業することは、JTE 以上にストレスを感じるにちがいない。AET に人間的な度量の大きさが必要なのはこのような理由からである。もちろん英語の指導助手として仕事をするわけだから、ある程度の英語の素養がなければならないが、一応出身国で審査にパスした大学教育を受けてきた人達だから、日本の中学生や高校生に教える程度の英語の素養はだれでも持ち合わせているのである。極言すれば、大学卒ぐらいの学力があれば誰でも AET として日本の教室で JTE の助手ぐらいはできるのである。しかし、AET として JTE と効果的な授業をすすめていけるのは英語の素養よりも AET の人格によるところが大きいのであ

る。人間的な度量といってもいいだろうが、異文化を受け入れようとする包容力や順応力、授業における生徒の遅い反応に対する忍耐力、学校の諸行事に教師や生徒と一緒に加わりようとする協調性や行動力、JTEだけでなく同僚の日本人教師たちと積極的に付き合おうとする社交性、その他諸々の資質が必要なのである。大学を卒業して間もないAETが多い現状では、彼らにそのような多くの資質を望むこと自体無理かも知れない。しかし年々幼児化していると言われている中学生や高校生と、様々なタイプのJTEを相手に仕事をしていくためには性格に偏りが無いオールラウンドな人格をもった人が望まれるのである。

10. AETのタイプ

AETに対するJTEの姿勢に4つのタイプがあると述べたが、反対にAET側はおおまかに2つに分かれるようである。積極的に日本の生活に溶け込み日本の文化を吸収しながらAETとしての仕事を全うしようと努力するタイプと日本の文化にあまり興味を持たずにただ生計を立てるための手段としてAETの仕事についてのではないかと思われるタイプである。

前者のタイプのAETには外向的な性格の人が多いようだ。この人達は職員室では積極的にJTEだけではなく他の教科の教師にも近づこうとする。教室でも生徒の生活習慣や考え方を聞くことにより日本人とその文化を理解しようと努める。従って、当然教師間や生徒間でも受けがよくいつもそのAETには誰かが相手をしているといった感じである。同僚の教師の自宅にも招待されたり、その地域のいろいろな行事などにも連れていってもらったりするのでますます日本の生活習慣や風俗に触れる機会が多くなる。自ずと日本語を聞く力も増すので日常生活でも不自由を感じなくなり、生活がますます楽しくなってくる。このようなAETからは一緒に仕事をしていても不平不満を聞かされることは少ない。

これに対し、後者のタイプのAETは職員室でも自分の机に座って読書をしたり手紙を書いていることが多くあまり同僚の教師たちと積極的に付き合おうとしない。ティーム・ティーチング相手のJTEとの打合せは熱心になされても仕事を離れてのお互いのコミュニケーションは少なく、たまに個人的な話をする時があっても私的な生活や学校での仕事上での不平不満をこぼすことが多い。積極的に日本的な生活習慣に馴染もうとしないので、異国での生活に不便を感じることからくる不満である。

学校で食べる昼食にしても両者に違いが表れるので面白い。前者のAETは食堂や職員室で他の教師が食べる和食にも好奇心を示し、同じものを食べようとするので、それを見たまわりの同僚たちは親近感を抱き食文化の違いに関して話も弾む。後者はメニューの中から主に洋食を選ぶか、自分でサンドイッチやハンバーガー等の弁当を持参して自分の机で食べる場合が多いのでここでも同僚たちとのコミュニケーションが見られない。

大変残念なことだが、日本人は東洋系や黒人に対しては白人に対する程の関心や好意を示さない人が多い。教師集団においても例外ではなく、有色人種と白人に対する接し方に

微妙な違いがあるようである。だから東洋系や黒人の AET が外向的性格を持つ前者のタイプであれば問題はないのであるが後者のようなタイプの AET の場合は実に気の毒である。このタイプの AET はほとんど契約の 1 年が終わると帰国するか、最悪の場合は任期半ばにして帰国してしまうのである。前者のタイプの AET は肌の色に関係なくさらに契約を更新して日本に滞在する人が多いのである。教室で教える英語が幼稚な内容なので、さらにまた同じ仕事を続けるのは退屈だろうが、それでも彼らに契約更新させるのは日本文化に対する憧憬と日本人とその風俗習慣をもっと理解したいという気持ちだと思う。このような AET とチームを組んで教えることができる JTE は幸せである。特に同じ学校に長期にわたって配属された場合は、チームを組む JTE をはじめとし英語科の教師ばかりでなく他教科の教師とも親密になってしまう。

11. 任期半ばで帰国した女性 AET の例

幸い私がこれまでに会って一緒に仕事をしてきた AET たちの多くは日本の同年配の若者たちに比べて数段もしっかりした大人の思考力や判断力を持った頼もしい人達だった。しかしながら、現実には任期半ばで辞めて帰国する AET がかなりいると聞いている。実際にもう 5、6 年も前のことになるが、九州のある県では 10 数名いた AET のうち大半が任期半ばで帰国したという話がある。その原因が彼らにあったのか、JTE 側か、それとも行政側なのかは知らされていないが、このことは AET 制度の成功の難しさを物語っているとその当時思ったものである。私と一緒にティーム・ティーチングをした AET は皆おおむね人格形成が良くなされていると感心していたのだが、その中で一人だけ途中で辞めて帰国してしまった女性がいた。表向きの理由は父親の病気ということだったが、本当の原因は大きく言えば日米間の文化の違いからくる誤解によるものだった。まず第一に彼女が県行政機関とかわした労働諸条件の履行に際し、その条件の解釈に食い違いがあったということだった。アメリカという契約社会で育った彼女にとって、契約通りに事が運ばなかったのは不思議に思えたのだろう。他に帰国の原因となった理由をいくつかあげたが、その中で日米の公私の時間という概念にたいする解釈の仕方に相違があって興味をそそられた。彼女は夜 11 時過ぎに県教育委員会のオフィスで一緒に仕事をしている男性から電話を受けたのである。その男性は彼女の上司にあたりスナックですでにアルコールが入っていたので、昼間の仕事の時とは違った打ち解けた話し方をしたのだろう。しかし彼女に言わせれば夜 11 時過ぎにしかも独身の女性のところに酒に酔って電話をしてくるなんてことは Sexual Harassment 以外のなにものでもないということだった。

12. 文化の違いから生ずる問題

女性 AET に対する日本人男性の行き過ぎた好意の表現の仕方についてはいろいろ問題になっている。その最たる事例が先頃佐賀県の片田舎で起きた事件だろう。ジョギング中

の女性 AET が村の青年に車に無理に連れ込まれようとした事件である。これはマスコミでも大きく取り上げられたので記憶に新しいところである。このような特異な例は別としても、教員の世界でもよく行われる宴会の席で手を握られたり腰をさわられたりという Sexual Harassment を受けたという女性 AET の噂は時々耳にする。日本の社会では酒の上での醜態を甘く見る風潮があるが、これに麻痺している我々にとってはちょっとした「おふざけ」ぐらいにしか思われないことが、女性尊重の思想が確立している国から来た AET にとっては我慢できないことになるのである。そのような下品なおふざけを問題視するのは文化の違いから生じる誤解であると単純に片付けてはならない問題なのである。

次の英文は『JET JOURNAL』の1989年秋号に掲載されている“Sexual Harassment and Kokusaika”という寄稿文からの抜粋である。今後ますます多くの AET を受け入れて、日本の生徒たちの英語のレベルを上げるためにはここに書かれているような恥さらし的行為があってはならないのである。単なる酒の上でのおふざけではすまされない問題である。

As a woman, I do not feel safe at enkais because people casually joke about “sawari” and there are men at my office who are well known for “sawari”. I have never been physically molested but nonetheless, I feel threatened by the possibility that I may be subject to such abuse.

Initially, I trusted my supervisor as we had briefly discussed sexual harassment and he reassured me that he had read the CLAIR handbook and was aware of the problem. He even warned me about a particular supervisor in the office who was notorious for “sawari”. However, at my Kangeikai, my supervisor got drunk and he verbally sexually harassed a woman I worked with. At one point he turned his attention to me. He looked at me lecherously and began to tell me I was attractive but I quickly shrugged him off. He then continued to bother the other woman as he tried to make her dance with him, but she escaped by making an excuse to go home.

As a result of that incident, I no longer trust my supervisor and even find it hard to respect him.

同じように次の THE DAILY YOMIURI の記事も AET に対する Sexual Harassment をとりあげたものである。その一部を紹介することにする。

“I was sexually harassed by the principal of the school,” said an assistant English teacher (AET) with the Japan Exchange and Teaching (JET) program

who wished not to be identified. A month after she arrived at the school, he proposed that she have sex with him over the weekend while his wife was away, she said. What she resented most, however, was the fact that the other teachers did not warn her despite the fact that he was known for pawing teachers and students' mothers.

No one would do anything about the situation, she said, because he was in his last year before retirement and they did not want him to leave on a bad note.

これに対して、次のようなコメントが編集者によってつけられている。

Her unfortunate experience may be exceptional, since most JET participants who report having been sexually harassed say it occurred outside the workplace.

確かに、この記事の例のように校長が AET に対して性的関係を迫るとは exceptional なケースかもしれないが、とにかく若い女性の AET が職場やその延長のような宴会などで Sexual Harassment を受けたという例は度々耳にしたものである。

もう一つ、THE DAILY YOMIURI の同シリーズから次の一節を引用する。

Another reader, Jeanette Teal, also expressed strong opinions.

“Running shorts are running shorts,” she wrote. “A women does not invite sexual harassment by wearing running shorts. It’s the old blame-it-on-the-victim routine... Women in Western countries for the most part don’t tolerate sexual harassment. ‘Adjusting their life styles’ should not include being quiet about sexual harassment. Such treatment is a violation of human rights—anywhere.”

女性 AET に対するこの種の sexual harassment については枚挙にいとまがないのであるが、その多くが学校で起きたり、勤務の延長のような宴会の席で起こっているだけにまことに嘆かわしいことである。このような心ない行為が英語教育に熱心に取り組んでいる女性 AET の意欲を削いだり、後に続く有能な人材に AET 志願を躊躇させるようなことがあってはならないと思うのである。

13. 有色の AET に対する日本人教師の反応

AET というとまず英国人やアメリカ人やカナダ人など白人を思い浮かべる人が多いだろう。最近ではオーストラリアやニュージーランドの英語圏からの AET も増えている。ところでこれらの国々には有色人種が多く定住していることは知識としては知っていても、実際に自分の学校にきた有色人種の AET を初めて見た時は職員室の教師たちの間に少なからず動揺があったものである。なぜか我々には英語を話す国民は白人であるといった

誤った先入観があるようだ。だから有色の AET が全職員の前で英語で自己紹介をしたときには職員室に再度動揺が感じられたのである。これらの英語圏の国々には多くの人種が住んでいるという事実を教職員だけでなく全生徒が知る絶好の機会なので白人だけでなく色々な人種の AET を大いに歓迎したいのだが、人の考え方は多様であって肌の色が物議をかもしることになるのである。

14. お国なまりの英語に対する反応

JTE の間でよく論じられることに、英国、アメリカ、カナダの英語はいいとして、オーストラリア人やニュージーランド人の英語はその発音の特異性のために教えるべきではない、という考え方がある。これは肌色の違い以前の国籍の違いの問題である。さらに極東アジア、東南アジア、インド系など有色の肌の AET の場合はそれぞれ独特の発音をするので、英語の授業で生徒に指導するのは好ましくないという意見もよく耳にする。しかしながら、現在、英語が世界の色々な地域でそれぞれ独特の発音や抑揚で話されているのを考えるとき、生徒が将来地球のどこに行っても通じる英語を教えなければならないと痛感するのである。その意味で生徒がいろいろ独特の発音をする AET から指導を受けるのはなにも英語教育にとってマイナスになるとは思えないのである。

オーストラリアから来た AET が教室以外の普段の会話では時々コクニーなまりの発音をもらすのに、教室ではキングスイングリッシュ的な発音を無理してしていたことがある。これは英語はキングスイングリッシュかアメリカンイングリッシュでなければならないと考えている融通のきかない JTE の気持ちをおもんばかっただけの懸命の努力だと思っていじらなくなったものである。なにもそのような無理をすることはなく、堂々とオーストラリアンイングリッシュを使っていいのである。これは私の考え方であって、この議論は私と同僚の JTE 間だけでなく、いろいろな研究会などでもたびたび話題になり賛否両論に分かれるのである。

15. AET 導入の効果

AET の生徒に及ぼす好影響は数多くいろいろな本や研修会等で報告されているので、ここでは他教科の日本人教師に対する影響に的を絞って述べてみたい。適応性に富み思考も柔軟な若い生徒たちに比べ、教師集団は概ね自我が確立しており、回りの言動によって容易には動じない年齢に達している人達が多いのである。しかし、AET を相手にする段になると、日頃しかめっ面をしている年配の教師までが相好をくずし、じつに気持ちのいい笑顔を見せるのである。相手が遠い外国からの客人であるという理由もあるが、最も大きな理由は英語で話しかけられるということにあるだろう。英語で話しかけられてなんとか意味がつかめ、単語を一つか二つ返して AET が理解したことがわかると、素直に喜ぶのである。年取った教師たちがそうだから、若い中学生や高校生の喜びは計り知れない。

英語でコミュニケーションできたという喜びがその後の英語学習の大きな動機づけとなるのである。これだけでも AET 導入の意義は大である。とにかく側で見ている JTE まで嬉しくなってくるものである。ところでもし AET が英語ではなくて流暢な日本語で話しかけてきたとしたら、そのような微笑ましい光景にはならないだろう。自分は中学校から大学まで英語を習ってきたにもかかわらず英語が話せない、という劣等感が他教科の教師だけでなく JTE にも大なり小なりあるものである。その劣等感に日本人が抱いてきた白人崇拜感情が作用して無邪気な笑顔が生じるのである。したがって、白人の AET と有色の AET を相手にした場合に見られる笑顔には微妙な差があるようだ。しかし毎年異なった AET に接するうちに肌の色がどうであれ、外国人に対する違和感もなくなってくる。そして片言の単語でも意志が通じるのだという自信が生まれ、あがることなく対等に付き合う態度も見られるようになってくる。これは外国人に対して抱いていた近寄り難いという気持ちを克服したことになるわけだから、AET 導入の大きな効果といえる。生徒への貢献という前に日本人教師への貢献という点で、英語教育に大きく寄与しているのである。

萬戸克憲氏は著書『外国人講師との授業』の中 (P.14) で次のように述べている。

指導案の作成や、その学校の教育努力目標の説明とかになると、言葉の役割ははるかに高くなる。しかも、英語科の教師が求められているのは、むしろこのような高次のレベルの伝達力であることが多い。しかしながら、日常生活に関していえば、身ぶり手ぶりの役割が非常に大きいということは、ともすれば英語の文そのものにとらわれがちな英語科の教師が、もう一度考えてみるべきことではなかろうか。つまり、英語教育の「基礎、基本」といえば、th がきちんと発音できること、be 動詞が間違いなく言えること、三人称単数現在の s を落とさないこと、などと考えられやすい。しかし、そのような知識や技能だけではなく、少々の言葉の不自由は乗り越えて、相手の意志をくみとり、自分の意志を相手に伝えようとする心構え、ないしは努力する態度が本当は大事なことではなかろうか。そのように考えると、他の教科の教師が、broken English でも良いから何とか意志を通じさせようとするこのような態度を育成することこそ、英語科教育の目標ということになりそうである。

このように外国人講師を相手に他教科の教師が片言の単語と身振り手振りを使って意思伝達している姿を見て、このような雰囲気は大切にしなければならないと思うのである。この雰囲気は必ず生徒にも反映するものである。JTE にも様々なタイプがあり、皆一様に AET 導入を歓迎しているとは限らないということは前にも述べたが、生徒が生き生きとして AET との会話を楽しんでいる姿を見れば、誰だって AET 導入による教育的効果を認めるだろう。JTE としては他教科の教師よりは会話力がなければならないと思いがちだし、まわりの人々もそう思っている。だから、間違わないようにできるだけ流暢に話

そうと苦戦する。このプレッシャーがJTEにAET導入に対して消極的な態度をとらせることになる。受験指導の妨げになるというのが、そのような教師たちのあげる最大の理由であるが、AET導入で英語の成績が落ちたという報告は未だに聞いたことがないし、私のこれまでの経験からしてもプラスになることはあっても決してマイナスにはならないと確信している。今年の九州地区英語教育大会での沖縄や宮崎の高校教師の研究発表からも、AETとの共同授業は受験英語教育にも役立つという感触が得られて意を強くした。

16. おわりに

まずJTEが様々な思惑を捨てて無私の心境でAETを受け入れる姿勢を示すことが最も大事だと思う。前に述べたように人間的な成熟度に欠けたAETがいて、職員室で孤立した状況になったとしても、JTEの温かい積極的なサポートがあれば、1年間の任期ぐらい乗り切ることができるはずである。もちろんAET側にも日本で働くことの意義をよく理解して事前に日本人の風俗習慣といったものを勉強し、ある程度納得して来てほしい。しかし、実際に慣れない異国に来た場合、予測していなかったカルチャーショックに出くわして惑うことは大いにありうることである。しかし日頃から双方の間に親しい信頼関係が築かれていたら、おおかたの不満は解消するはずである。国際化した社会において、いろいろな場で発言力不足のために日本の立場をうまく説明できずに誤解され非難を受けている部分が多いという。このことを考える時、現在の英語教育を早急に変えていかなければならないと痛感する。AETの導入により我々JTEはそのきっかけを与えられたのである。日本の将来のためにJTEは一丸となってAETとのチーム・ティーチングでより効果的な指導ができるよう努力しなければならないのである。

参考文献

- * 『JETプログラム—5年とその将来展望—』(1992) 自治体国際化協会
- * JET JOURNAL (1989) “The Council of Local Authorities for International Relations”
- * JET JOURNAL (1992) “The Council of Local Authorities for International Relations”
- * THE DAILY YOMIURI (1992) “Cross - Cultural Sex Not A JET Goal”
- * THE DAILY YOMIURI (1992) “Readers’ Mailbox : Taking Issue With JET Articles”
- * 和田稔・荒木秀二・関正幸著 (1988) 『外国人講師との協力を生かす英語科授業』明治書店
- * 萬戸克憲著 (1988) 『外国人講師との授業』大修館書店

(1993年1月18日受理)